



3度目の“サポート役”

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課(☎20-15503)へ。



渡邊 正巳さん(本町)

本町出身。中学から大学時代までバスケットボール部に所属し、教師になってからは部活の顧問として生徒の指導に当たる(現・佐原白楊高校)。炬火ランナーとして若潮国体、アシスタントコーチとして海邦国体に参加。ゆめ半島千葉国体には、運営側で携わる

「国体の開催は、スポーツ施設などのインフラだけでなく、貴重な出会いをもたらします。後者が、国体開催の一番の財産ではないでしょうか」

中学から高校、大学、教員になった今もバスケットボール一筋。選手としては国体に縁がなかったが、幸運にも、3国体にかかわる機会に恵まれた。

初めは、中学3年で迎えた、地元千葉開催の若潮国体。炬火ランナー、メインの走者を補佐する「副」保持者としての参加だ。国体の象徴・炬火をリレーするという重責に、身が引き締まる思いだった。そして、当時、指導を受けた体育教師との出会いで、自らの将来を決めた。

「ガツンと叱るといふよりは、的確なアドバイスをしてくれる兄貴的存在。当時すでに、将来こんな指導者になろうと決意していました」

念願の教師になって迎えた海邦国体(沖縄)。バスケットボール成年男子千葉県代表の「アシスタント」コーチとして参加した。現地での宿泊は、すべて民泊。島人たちの温かい歓迎に、熱いものが込み上げた。



渡邊さんは土屋の交差点から薬師堂前までをリレーした(写真は別地点のもの)

「偶然にも、自分の誕生日が滞在に重なったのですが、ヤギ料理や泡盛で宴会を催してくれましたね。地元民のおもてなしの気持ちだが、ビンビン伝わってきました」

そして、ゆめ半島千葉国体では、バスケットボール競技の運営に携わる。熱意ある大会関係者が多く、毎日がとても刺激的だ。

「今の肩書きは、県高体連バスケットボール専門部「副」委員長ですが、よくよく考えてみると、3回の経験は、すべて「サポート役」。裏方稼業が性に合っているんですよ」

教師の本業との両立は、予想以上に激務だ。「先の見えないトンネル」と苦笑いするも、観客で満杯になった会場を思い浮かべながら裏方として奔走する。

編集後記

1,435mm。鉄道ファンならピンとくると思いますが、実はこれ、新幹線のレール幅で「標準軌」と呼ばれています。17日に開業する成田スカイアクセスの線路幅も1,435mm。ちなみにJR在来線の幅は1,067mm。線路幅でつくづく思うのは、もし全国の鉄道が同じ規格だったらということです。今回の線路は土屋地先から空港までJR線と同じ高架上を走りますが、線路幅の違う2本の単線が並ぶだけ。そこで、それぞれがすれ違い場所の信号所を新設することに。全国同じ線路幅だったら、ここだけでも大幅な経費節減が可能だったのですが。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。